
Rの称号

異崎翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Rの称号

【Nコード】

N6496U

【作者名】

異崎翔

【あらすじ】

主人公・藤堂俊也の通う超凜学園は、超上の力を持つ者だけが入れる学園。クラス分けの試験をさぼった俊也は当然最下位クラス。そんな彼の下に降ってきた少女は何か秘密があつて？王道っぽい感じの自称ファンタジー。そのうち人によっては残酷と感じる描写も出てきます。主人公最強ものです（ヒロインも最強？）。苦手な方は注意してください。

ブローグ

「俊也さん、起きて。起きて下さいっ」

寝た状態の俊也と呼ばれた男をゆする彼女は白石悠里。

桃色のやわらかそうな長い髪を二つに縛っている、スタイルの良い女性。彼女は何度声をかけてもおきてくれない俊也に困ったように頬を膨らませ、繭を吊り上げる。それでも可愛いと思える彼女の顔は、男にとっては凶器だろう、なんて俊也は薄目を開けながら考えていた。

悠里は淡い緑色をしたシャツに、緑と茶色のチェックの入ったスカート……まあいわゆる制服なのだが。その制服を完璧に着こなし、今だ起きない俊也にため息をつく。そして左手を垂直にまげ、

「早く起きないと丸焦げにしちゃいますよ？」

なんていいながら手に小さい炎のかたまりを出し始めた。

「うわああああ！ちよつと待った！おきてる、おきてるぞ！？だから人に家で殺人未遂をするのはやめようか！いつも言ってるけど！」

冷汗ダラダラで飛び起きる俊也に、悠里はにっこりとしながら言った。

「おはようございます。新学期だというのに、遅刻しますよ？」

「…………はい」

それに俊也は小さな声で呟き返した。

俊也は淡い緑色をした制服をだらしく着て、寝癖のついた黒髪をワシャワシャとかく。まだ眠いのかその黒い瞳は軽く閉じられていて、とりわけ整った顔立ちが寝癖と薄目のせいで台無しになっている。

そんな俊也と笑顔が耐えない悠里は、仲良く並んで登校中。

「クラス替え、一緒だといいですね」

「んなわけねえだろ。俺は試験さぼったんだ。最下位のDクラスに決まってるだろ」

彼らの通う学園は、ただの学校ではない。
超凜学園。
ちようりん

その学校の名前は、当時学校を立ちあげた人が、『超上の力を持った若き男女達が何事に屈することの無く、凜とした立ち振る舞いで良き方向へと誘うこと』を願って『という長ったらしいことを言ったのが由来らしい。』

まあ、そんな余談はいいのだが。

彼らの通う学園は、超能力を持った人が入る、特別な学校なのだ。超能力の種類は多種多様。悠里みたいに炎を作り出すものもいれば、雷などを操ったり、影を操ったり。

そして彼らの学園は二学期製で、毎学期ごとに試験を行い、成績順にクラスが振り分けられていく。

時折発見される、天才。

学園に認められた天才、つまりは危険な能力を持ち合わせているか、自分の能力を使いこなしているか。大抵はその二つに分けられる。選ばれた天才のクラスはS。一般の能力者たちはA～Dに振り分けられる。

超凜学園。

そこは、とてつもなく広い敷地の上に成り立つ学園。その正門に立ち、超凜学園を見つめる。

「うわ、いつ見ても嫌味ったらしいでかさだな」

その広さ、東京の四分の一をしめるほど。

「おい、藤堂！」

「げ、鬼塚……じゃなくて沖塚先生。なんすかー」

「なんすかー、じゃない！今鬼塚つつつたる！？…ってかさつさと教室に入れ！授業が始まるぞ」

「ういーっす」

開口一番やかましい声を張り上げるこの男。

黒髪をスポーツ刈りにした、ジャージ姿の体育教師。沖塚恭一、^{おきつかきょういち}2

5歳。独身。

彼の罵声は鬼のごとく恐ろしい形相と一緒に飛んでくるため、ほと

んどの生徒が恐れをなしている。
生徒指導の先生でもあるため、

「何だ、そのだらしない格好は！第一ボタンまできちんとしめる！
ついでに毎度毎度遅刻するんじゃない！下るのは白石の評価なんぞ」

「え、俺の評価は！？」

「己はもう下りきっているだろうが！」

なんて、口うるさく突っ込んでくる今どき珍しい教師。

やつのことで通過した鬼塚…もとい沖塚の門。その後校庭に張り出されているクラスわけを見て

「あー、やっぱりな」

「離れちゃいましたね」

「ま、当然だな」

悠里はBクラス。彼女は容姿もよければ成績も良い。

そして俊也のクラスは想像通りD。試験を受けなかった彼が入るべくして入るクラス。

悠里はかなり残念そうに、ではまた明日、と言って廊下を歩き去った。

その去った背中を見つめて、やっと開放された俺フィーバー、とか変なことを考えながら開放感に身をしみさせていた。

俊也のクラスはD。

簡単に言えば落ちこぼれクラスだが、もう一つ言うと能力の強さを鼻にかけないクラスでもある。

ガラガラつとトビラを明けて入ると、なんかめっちゃ知っている奴らがいた。

「よう！お前も試験さぼったんだってな！」

「本当かい？君も試験出られなかったのか」

「……………」

先に声をかけてきたのは坂上隆。さかがみ ゆう

少し赤のかかった茶髪に、茶色い瞳。斬新な性格で、女好き。能力は生命の早送り。つまりは生命の時間を少しでも早く進ませることなのだが、本人はこの能力をあまり好いていない。なんでも「早送りなんてしちまつたら女の子が若々しくなくなるだろ？」だそうだ。

次に声をかけてきたのは信条翼。のり つか

癖の無い真直ぐな茶髪の、爽やかスマイルを顔に定着させたような男。その爽やかな笑みからこぼれる真つ白な歯は嫌味なほどだ。能力は風を操ること。能力までもが爽やかなスマイル野郎。人付き合いが得意で、たぶん嫌われているとしたら信条のモテ度をねたむ可愛そうな男達からだけ。

そんな彼等を俊也は見て、

「で、お前らは何で試験でなかったわけ？」

「いやー、道端で今にも生まれそうな赤ん坊をお腹にかかえたご婦人がいてなー」

「それでその女性を病院まで連れて行ったら時間切れって言うわけなんだ」

「……………」

なんてベタな奴らだ、と内心思っても口には出さない俊也だった。

そして新学期のため早くも学校が終わった彼らは、すぐに帰宅し始める。

そこで俊也が、爆弾とも呼べるような人間を拾うことになると思っ
てみなかった。

プロローグ（後書き）

この作品を目に留めていただきありがとうございます。
もしよろしければ感想、評価などよろしく願います！

リミッター

「はぁーだりー」

そんなことを口ずさみながら徒歩で帰宅する俊也。

学園には寮もあるのだが、俊也は寮に泊まるのがイヤで少し離れたアパートを借りている。

徒歩15分、遠くもなければ近くもない微妙な場所にある。

その大家さんが俊也の親戚で、快く俊也を受け入れてくれた。問題を起こさないという条件付で。

俊也は近道をするために商店街の路地裏に入る。

長い商店街を突っ切るなんてダルイことしたくねえー、なんて彼は思いながらゴミ置き場の脇をすり抜け、塀を越えようとした時…

ガラガラガラッ！

何かが転がってくるような音がした。後ろを見ても、横を見ても、前を見ても誰もいない。なら、上か？なんて冗談めかしてみてもと

「うそだろっ!？」

屋根から、女の子が落ちてきた。地面と平行になるような体制で落下してきた。

気を失っているらしく、体が動いていない。

そんな彼女を俊也はお姫さま抱っこの状態で受け止めると、ジーン

と、彼女を受け止めた衝撃が足に痛みとなつてはしる。
おいおい嘘だろ？そんな展開あつてたまるかよ、なんて彼は思う。

「空から女の子降つてくるとか……」

そんなことを呟きながら彼女を見てみると……………。
美少女だった。

悠里にも劣らないくらいいの、美少女。むしろ悠里以上の容姿を持つた女の子かもしれない。

ちよつとふわつとした可愛い感じの水色の髪を長く伸ばしていて、切れ長の瞳。可愛いとも、美しいともいえるような、むしろ言えないような微妙な一線にいる少女。その華奢な体軀たいくに透き通るような白い肌。

そして、ズタボロになつた彼女の服装。

よくよく見ると服は途切れ途切れにつながっていて、スカートから血のついた太ももが乱れ出ている。
かなり衰弱しきっている状態だった。

「やばい、かな」

そんなことをいいながら、彼は振り返る。
するとそこには

「よく私の気配に気づけたわね」

なんていう、女が立っていた。

赤い短髪の、前髪を上げた二十歳前後はたちばんごころの女。

その手には血塗られたナイフが一本握られていて。ああ、ちよつと死亡フラグが成り立ってきたかも、なんて彼は思いながら、ちよつと強気の口調で女に問う。

「大人がなに、いたいけな美少女を傷つけてるわけ？」

とりあえず、この娘に傷を負わせた理由、追いかけている理由を問いただして逃走、それが一番だな、なんて彼は思う。

しかし、その女から返事は返ってこない。それどころか

「その女をこちらにわたしなさい。関係のない人間を殺したくはないわ」

なんて脅迫しだした。

一見取引に見えても、これは立派な脅迫だ。殺されたくなければ彼女をわたせ、この女はそういつているのだ。

そのことによって俊也に冷汗がにじみ出る。

話しの通じるうちに解決策を見つけなければいけない。

この娘を引き渡せば簡単だろうが、あいにくこんな美少女をたてに自分の身を守ろうだなんて気にはなれない。これが野郎だったら即座に引き渡してるかもしれないが。

「じゃあ、この娘をわたしたらあんた達はこの娘をどうするわけ？」

「……………」

女は、口をつぐんだ。

良い扱いはされない。それはその沈黙でわかりきった。

そして仲間がいることも。

なら、この娘を赤髪の女にわたすわけにはいかない。わたしたら色々俺の男としてのプライドみたいなものがボツキボツに折れる、と彼は確信する。そして女にかなり強気に出ると

「あいにくだけど、保護者でもない奴に美少女わたすぐらいだった

「俺がかくまう」

「……そう、じゃあ、死になさい！」

ほらきたよ。

やっぱり俺殺されるんじゃない、と、予測できたことに対して自分の命が危ないかもしれないなあ、なんて能天気を考える。

女はものすごい速さでこちらにかけてきた。

でも、どうせ死ぬんだったら第一リミッター解除してもいいかな。

なんて考えながら、この美少女を壁に寄りかからせるように座らせる。

所々に流血しているのが痛々しい。

しかし、今はこの美少女を守ることが先決だ。彼は自分の頬をパンパン、と二回ほどはたき、覚悟を決める。

「ごめん、手加減はできないと思う」

「はあ？なに言ってるのよ？死ぬのはあんたよ！」

威勢よく駆けて来る女に、俊也は小さくため息をついた。

『<<第一リミッター・解除>>』

俊也は誰にも聞こえないような小声で呟く。

途端に、彼の動きが目に見えないほどに速くなった。

彼は速いスピードで走る女よりも高速で動き、女の腹部に一発拳を入れる。

「がぁ……な、に……？」

女は何がなんだかわからない、と言うような顔をしながらその場に倒れた。

そのときの俊也の、彼の瞳には赤い鮮血の色と、黒く澱んだ悲しい光が蠢いていて。

そして彼は、ゆっくりと気絶している美少女の方を見て、そろそろくるかな、なんて彼は考える。

「ぐ…ほらきたよ…がああ！げほっ…げほっ」

体がきしむのを感じながら吐血した。

リミッター（後書き）

デイルムン・R・美鈴

朝日がまぶしくて、目が覚める。

「ん……」

「お。起きたか美少女」

「!？」

はっと、目が覚めた。

少し狭い一室。彼女はベッドに寝かされていて、彼女の顔を覗き込む男の姿があつた。

バツと飛び起きて、体勢をかまえる。

すると男は

「いやいや、俺君の事狙ってる奴じゃないから。むしろ救世主様だからっ」

「……………」

「あ、信じてないって顔してるな。あの赤髪の女追い払ったの俺なんだぞ？」

彼はそんなことをいいながら屈託なく笑う。

時刻は、10時。

ずっと起きていたであろう彼はまだ寝癖のついたままの髪をくしやっとかいた。

追い払った？

こんな馬鹿そうな男が？

そんなことを思っていると、彼の服装に目がいく。
だらしなく着られている淡い緑色の制服……。

「あんた、超凜の生徒？」

「ああ。つってもDクラスだけだな」

「……………」

Dクラス。それは超凜学園の最下位のクラス。

そんな彼があの子を追いかけてたつて言うの？

疑り深い目で見据えていると、今度は彼が自己紹介を始めた。別に聞いていないのに。

「俺は藤堂俊也。お前は？」

「……………デイルムン・R・美鈴^{ミレイ}」

「長い名前だな」

「私は日本人と外国人のハーフなの」

「納得」

すぐに納得した彼、俊也は、美鈴に

「さて、と。とりあえずなんで追われてたか。できる範囲内で教えてくれる？」

できる範囲内という言葉を強調して、問う。

しかしそれを答えることはできない。

答えてしまったら彼は組織に追われるか、自分を狙ってくるかな、と彼女は確信した。

「……………ごめんなさい。答えられないわ」

「じゃあこっちから質問する。答えられるものだけ答えてくれれば

良い」

「わかったわ」

彼は了承した美鈴を見て、少し笑ってから質問を始めた。

「能力は？」

「もってる。でも、言えない」

「あの追ってきていた女の組織名は？」

「言えない」

「なぜ追われていた？」

「言えない」

「家族は？」

「皆散り散りで暮らしているわ」

「最後。スリーサイズは？」

「上から　　って、なに言わせんのよ！？」

美鈴は腰にはめていた拳銃をものすごい速さで取り出し、俊也の頭に近づける。

この男、ただの変態か！？と、内心イライラしながら引き金を若干引く。

すると彼は若干あせったような声色で、

「うおっ。引き金を引くのはマジ勘弁」

「不可能」

「ちょ！マジで、俺救世主だぞ！？命の恩人を殺すのかお前は！」

「そもそもそこが怪しいのよ！なんで私の拳銃一つかわせないあんたがあの女を追ひ払えるわけ！？それにあんたに外傷が一つも見当たらないわっ」

すると彼は一瞬押し黙り、視線を逸らした。

なにか、やましいことを奥さんに見つけた夫みたいな表情をしている。いや、たとえば悪いか。
瞳に黒い澱め気がはしり、彼は苦笑しながら答えた。

「それはあれだ。俺の能力だ」

「どんな？」

「言えない」

「……………」

今度は、美鈴が質問をする側に回った。

しかし彼は答えない。

美鈴に秘密があるように、彼にも言えない事情があるのだろう。

美鈴ははあ、とため息をつく。

「とりあえず、助けてくれたのは感謝するわ、ありがとう」

「どういたしまして」

「じゃあ、迷惑もかかるから、私は出ていくわね」

「行き先は？」

「伯父のところ」

そういつて、ベッドから立ち上がる。

瞬間、ズギッと足に痛みがはしった。一瞬間をゆがめたが、すぐに無理やり戻して、このアパートを出た。早く、伯父の下へ……。

俊也は彼女の後姿を眺めて、携帯が光っているのが目に入る。

「なんだ？」

履歴 23件

氏名 悠里

悠里

悠里

悠里

悠里

悠里

悠里

悠里

・
・
・

悠里

内容

『ごめんなさい。今日は朝、おこしに行くことができません。きちんと学校に来てくださいね!』

『俊也さん? 学校に来てなかったみたいですけど大丈夫ですか?』

『俊也さん? もしかして具合悪いんですか?』

『俊也さん! ? 今から行きます!』

「……………こりやまた盛大な……………」

ピンポン。

たぶん悠里だろう。相変わらずの心配性だ…。ちょっといき過ぎな気もするが…。そんなことを考えながらガチャ、と扉を開けると、今にも泣き出しそうな顔で悠里が立っていた。

「俊也さん! 何で答えてくれないんですか! 本気で…心配した…ヒツク、のに…」

訂正。

すでに泣いていた。

「悪い。たまたま携帯見れなくってさ」

「うわーっ!」

そのまま抱きついてくる悠里。

本気で心配させたようだ。

もう一度、ゴメンと謝る。すると突然悠里は手から炎塊を出し始めた。

「それはよしとして俊也さん？さっき出て行った水色の髪の女の子は誰ですか？」

あれ、悠里さん。笑顔が怖いですよ？

ってか、さっきまで泣いてませんでしたか、あなたは！

俊也は本気で冷汗をかき始めた。しかも猛烈にダラダラと。

「えっと あれは」

「答えられないんですね！？こ、このっ、浮気者ーっ！っ！っ！」

どんどん悠里の炎が巨大化していく。

浮気とは好きあっていてなんらかの結婚や恋人という接点がある人がいうものですよ！？なんて彼は内心考えながらも、向かってくる炎に恐れをなした。

「え、なんで…まだ答えてなぎやああああああっ！」

アパートに俊也の絶叫がこだました……。

プスプス…。

俊也は悠里のせいでこげた体をふらふらと動かしながら教室に向かっていた。

ガラガラッ。

扉を開き、Dクラスの教室へと入る。

「おい、藤堂！」

開口一番、坂上の声が響いた。

坂上の方をかるうじて見ながらなんだ、と問いかけると坂上は声を荒げながら顔を近づけてきた。

「転入生だ！それもすごい美少女！」

「^{ちけ}近えよ……。美少女？」

坂上が指をさす。その方向を見ると……

「「あああー！……」」

美鈴がいた。

二人とも相手を指差し叫んでいる。

ま、まさか……今日から同じクラスで生活するのか！？この爆弾女と！

増えたクラスメイト

「「あああーっ！！」」

二人はお互いに指をさしながら叫んだ。

彼女は淡い緑色の制服、超凜学園の制服を着て、腰に一丁の拳銃を携えている。ふわふわとした水色の髪は一つに頭の上で団子状にまとめていた。

「なになに？お前ら知り合い？」

「そうなのかい？それは是非とも聞かせてほしいね」

叫ぶ俊也たちを見て、坂上さかがみと信条が問うてくる。それもかなり興味深そうに。

しかしその言葉は彼らの耳に入ることはなく。

「なんでお前がこんな所にいるんだよっ」

「仕方がないでしょ！伯父さん、この学園の学園長なんだからっ！伯父さんに『テスト終わっちゃったから一学期間だけ、Dクラスで我慢してね。これあげるから』なんていわれたら断れないでしょうが！」

「うおい！最後おかしくなかったか！？『これ』ってなんだよ！？お前は何に釣られたんだあ！？」

「それは……そんなことはどうでもいいのよ！とにかく、今日からクラスメイトよ。仲良くしましょうっ？」

美鈴ミレイは顔を若干赤らめながら手を差し伸べてきた。しかし俊也は

「断る。お前といると俺が死ぬ。色々」

今朝もお前のせいで悠里に　そう続けようとすると、カチャ、と最速で抜かれた拳銃の銃口を後頭部に押し付けられる。それを見ていたクラスの奴らがどよめいた。まあ、無理もない。これだけの速さで拳銃を構えられ、その上能力者の女なんて早々いるものではない。

彼女は俊也の頭を前に、引き金に指をかけ、少し引く。

「それは私に対しての宣戦布告ととってもいいのかしら？」

「いいやいやいや！引き金後数ミリ引いたら俺確実に天に召されるからな！？謝るから殺さないでくれ！ほら、俺命の恩じ」

「くだい！いつまで命の恩人だとか救世主だとか言うつもり！？いっぺん死ぬ！」

「え、嘘。ぎゃあああああああ！」

引き金は引かれなかったが、代わりに拳銃の腹で殴られた。しかも：

「おい、その拳銃なんか特別な素材で作ってあるだろ！ガチで痛えぞ！」

「そうよ？この拳銃はオリハルコンで作られているの」

特性素材だったらしい。どうりで痛いわけだ。

すると今度は坂上が拳銃に興味を持った。

坂上も拳銃を使う使い手だ。自分の能力をあまり使わない代わりに、荒事は拳銃で対処している。

そんな彼は美鈴に近寄り、

「美鈴ちゃんの拳銃ってオリハルコンなんだ！？ちよつと見せてくれないか？」

「え？いいけど……」

突然のことに一瞬驚いた美鈴は、坂上の拳銃を見る目（キラキラしている瞳）を見て、渋々承諾した。

すると

ガラガラッ

不意に教室の扉が開いて、担任と思わしき人物が入ってくる。

「ホームルームを始めます」

低く響く声だった。

見ると黒いスーツに身を包んだ、癖のない黒い長髪の、スマイルを信条同様に顔に定着させたような若い男が教卓の前に立っている。

「えー、昨日は出張で挨拶ができませんでした^{くろかわ}が、黒川と言います。このクラスの担任です。皆さん、質問はありませんか？」

につこりと黒川は言った。途端に、女子達がキャアーーと叫びだす。次々に、生徒が といつても女子だけが 手を挙げ、質問する。

「先生的能力は！？」

「秘密事項です」

「先生は何歳ですかあ？」

「25です」

「奥さんは！？」

「募集中ですよ」

「気になる女性のタイプは!？」

「気のきく優しい女性でしょうか？」

「きゃあああー!」

…………… などなど。

全ての質問に満身の笑みをもってして答えた黒川。男子から軽い殺意が感じられるが、まあ黙っておこう。

不意に気になり、美鈴のほうを見てみると彼女はむっすうとした顔つきで頬杖をつき、机の斜め下……足元の辺りを見下ろしていた。どうやら彼女は胡散臭いスマイル男は嫌いなようだ。

そんなこんなで朝の朝会は女子の叫び声で幕を閉じた。

黒川が退場していくとき、一瞬こちらを冷たい表情で見た気がするが、気のせいだろうか。

一日の授業も平凡に終わり、俊也はそそくさと教室を出た。

あまりにも長く教室に長居していると悠里が迎えに来て、もてない男子共の餌食になるからだ。俺が。

徒歩十五分。

それがアパートへの帰りに使う時間。路地裏の近道を使えばもっと

速いのだが、あいにくまた巻き込まれるのもゴメンなので今日は近道をせずに商店街をそのまま突っ切った。

少し古いが、丁寧に掃除されている白いアパート。

そのアパートの二階に上がり、扉を開ける。そして荷物を置こうと部屋に入ると

「あ、お帰り」

「……………どちら様でしょうか」

いや、わかっている。

水色のふわふわした髪をお団子ヘアにまとめた、透き通るような白い肌をした、切れ長の瞳の美少女。彼女の名前は、デイムン・

R・美鈴^{ミレイ}だ。

しかし。

しかしだ！

「何でお前がここにいる」

「へ？」

まるで、いるのが当然のような言い方で、彼女は間抜けな声をもらした。

数秒たった後、彼女はああー、とか言いながらここに来たまでのいきさつをしだした。

「さっき伯父さんがね、『あれが用意できなくなったんだよ。伯父さん最近多忙でさあ』なんてほざきだしたから家出してきたのよ」「いやいや、間違ってるぞ！ってか『あれ』ってなんだよ！なんでそれごときで家出をする！？いや、家出をするなどは言わない。家出をするなら勝手にすれば良い！でも何で俺の家なんだ！？」

「そんなの決まってるじゃない」

彼女はさも当然のようない振る舞いで続ける。

「あんたしか知り合いがないのよ」

「……………」

なんてかわいそうな奴！と、思ったのは口には出さない。

しかし彼女の言う『あれ』や『これ』とは何なのだろうか。先ほどから伯父の……学園長の旦那との会話に出てくる。彼女が家出するほど大切なものなのだろうか？なんて、彼はちよつと真剣に考えてみたりする。

まあ、そんなことはどうでもいいのだが

「本気で泊まる気か？」

彼にはそれが心に引っかけた仕方がなかった。

き…金髪美女

太陽も完璧に沈み、付が輝く時間。
暗い、夜の時間。

時刻は二時をまわろうとしていた。

部屋では俊也と、美鈴がスヤスヤと眠りについている。

ガシャアアアアンツツ！

突如、大きな音を立ててガラス窓がわれた。

「俊也！」

「……………んだよ」

「ごめん、巻き込んだ」

美鈴は飛び起き、まだ眠さの残っている俊也に声をかける。
彼女はガラスの破片を見て、悲しそうに謝罪した。

数秒たち、俊也は割れたガラスを見つめると……………無残に割れている。
もう、一般人には修復不可能なほどに。もう一度言っと、このアパートに澄む条件が問題を起こさない、なのだ。

「……………はあああああああ！？何で割れてんだよ！？」

ガラス窓が割れたことによってすっかりと目が覚めたことを確認した美鈴は、俊也の腕をつかみ、ものすごい速さで走り出す。
なんだよ、そう言う事も許されない沈黙が続く、彼らは港の使われ

ていない倉庫まで走った。

「……………っはあ」

彼女のあまりにも速い走りに、少し息が乱れる。

やっと、どうしたんだ、そう聞こうとすると今度は

「よくここまで逃げてきたものだ。まあ、ディームン家の跡取りともなれば、それくらいはできるだろうが」

なんていいながら金髪の女が空から降って来た。

金髪でかんざしを頭にとめ、黒いマントのようなものを羽織っている。

彼女は地面に着地すると、マントを脱ぎ捨てた。

「……………」

絶句。

やばい。やばいぞこれは。

彼はそんなことを考えながらも、金髪美女の体を見る。

…………… 出るところは出て、締まるところは締まるという女性の誰しもが憧れるような体つき。

しかもその上、胸元が大きく開いた、黒い露出の多い服を着ていた。彼女の服の胸元は引き裂かれたような跡を残しながらギリギリ見えないような大きさに開いていて、へそを出し、右側の足は膝まで。

左側の足は太ももでジーンズと思われるズボンが裂かれている。

そしてハイヒールをはき、まだ若い たぶん俊也たちと同じ年ぐらいたろう というのに、大人の女性というオーラを存分に出し切っていた。

「き…金髪美女……」

口元がゆるむと同時に、そんな言っではいけなかったような言葉が漏れ出す。

「貴様。私を愚弄するのか!？」

いや、愚弄どころか、全世界の女があなたの体つきに愚弄されてますけど!？」

と、良いたかったのだが、金髪美女は、この言葉があたかも自分を汚す言葉のように怒鳴ったため、やめておいた。
すると今度は隣にいる爆弾女が俊也の足をガツンツと勢いよく踏む。

「奴は敵よ!」

と、彼女は小声で叫んだ。

もちろん痛さに耐えられなかった彼はその場にうずくまり、足の痛みを消そうと踏ん張っている。

「~~~~つにすんだよ!？」

やつとのことで声を出す、聞く耳持たず。

うおい、俺の話を聞けええええええええええ!という彼の心の叫びは気にも留められず。

美鈴と金髪美女は、二人の世界にいつてしまった。

「これで13人目よ?私を倒しに来たのは。飽きないわね、あなた達も」

「その十三人と私を一緒にしてくれるな。奴らはただの下っ端に過

ぎない」

「あの赤髪の女は？」

「？……ああ、あいつなら任務失敗で」

「殺したの？」

「……ああ」

なんて、ちよつと物騒な話をしだす二人。

かすかに、美鈴から殺気が出ているのがわかった。たぶん、常人なら気づかない程度の、少量の殺気。しかし美女はその殺気にすぐに反応して、美鈴との距離をとる。

「……その金髪美女。下っ端なんてものじゃないぞ」

俊也は、美鈴に気をつけると、遠まわしに言う。

それに気づいたのか美鈴は微笑してわかってる、と一言呟いた。

邪魔になるであろう旬やは少しはなれたところでアグラをかき、ふあああゝとあくびを一つして彼女達を見据える。

海の、塩の臭いが一瞬強くなったとき、二人は一瞬にしてお互いの距離を詰めた。

キーンッ！

美鈴の拳銃と、美女のかんざしが強くはじきあう。

……あの簪武器かんざしだったのかよ……、なんて思うほど、武器としては見えなかったただの簪もどき。しかしよく見てみると簪の先は鋭くとがっていて、まるで刃物のようだ。

「くっ……」

美鈴はわき腹に鋭い蹴りをくらい、短い悲鳴を漏らす。

「加勢しようかー？」

「いらないわよ！むしろ邪魔！」

俊也が聞くと、彼女はすぐに罵声付で返答した。

俊也はあつそ、と小さくはき捨て、二人の戦いを見守る。

美女が簪で攻撃したかと思うと、わき腹に拳や蹴りが入る。拳や蹴りが入ったかと思うと、簪での攻撃が美鈴を痛めつける。

彼女はフェイントをかなり上手く使いこなしていた。

決して美鈴が弱いわけではない。

彼女は常人以上の速さで動き、攻撃を繰り返している。クラスで分けたらB。もしくはAに入れるかどうか、そんなレベル。

よく馬鹿な発言をするものすごい速さで彼女に拳銃を突きつけられる。

俊也や、他の奴らがよけきれないようなスピードを軽々と出せるほど、彼女のスピードはすさまじく、命中率も高い。パワーよりもスピードで闘ってきた人間なのだろう。

しかし美鈴のスピードを惑わせるような動きを美女がする。彼女は飛びぬけて反射神経がいい。それはこの戦いを見ていてなんとなくわかった。ゆえに最初に出てくる攻撃を重点的にいなそうとするから、フェイントなのに体が勝てに反応し、次の攻撃に間に合わない。たぶんだが、美鈴は長期戦は得意ではない。息が乱れてきていた。

「っはあ……くっ……」

「デイムン・R・美鈴…… まだまだ完成してはいないのだな」

「…………… どういうことっ」

「まだ完成していないとなれば好都合だ。今のうちに、死んでもらう……！」

美女はそう叫んで、簪を振り上げた。
と、同時にわき腹へと拳を進める。

「美鈴！左ガード！」

「！？」

突如俊也が叫ぶ。早く美鈴が反応できるように。

その言葉に反応して、美鈴は左のガードを固める。さすが美鈴だ、反射神経はいいな、と彼は思う。すると美女は止めきれなかったのか、拳がそのまま左脇腹：つまりは美鈴がガードしたところへと拳を突っ込む。

「なにっ？」

美女は初めてガードされたことにとまどいつつも、いったん距離をとり、もう一度フェイントを仕掛ける。左足で蹴る動作をして、簪を見えない死角から振り下ろす。

「右上、簪！」

「……………！」

また、俊也の声で美鈴がすばやく反応する。

能の回転が速いのか、彼女は言われたことをすぐに理解する。

また、美女の攻撃を防ぐ。

その繰り返しをそれから五回続けた。しかし全て俊也の言葉により美鈴は防いだ。

「くっ……………仕方がない」

なんていいながら美女は後ろに飛び退き、

「私の能力を見せてやるう」

そう、美鈴と俊也に向かつて告げた。

騙されたぁあああ！

突如、彼女の周りに先よりも大きな殺気が流れた。

そして視線が、美鈴からアグラをかいて座っている俊也に向けられる。

「は？え、俺？」

「貴様は美鈴このおんなと闘うのに邪魔な存在だ。先に消えてもらっ」

「ちよ、俺マジで弱いから！むしろいてもいなくても同じ存在だから！空気みたいな奴だから！」

「何をゴチャゴチャと言っている。立て」

「そうそう、俺空気…って、はぁあああああ！？何で戦いに俺が巻き込まれるんだよ！二人でよろしくハアハアやってればいいだろうが！三人より絶対二人のほうが楽しいからな！」

なんてわけのわからないことをツラツラと並べ立てて俊也はアグラをかけたまま、少し後ろに後ずさる。

刹那。

ツウー、と頬が斬れ、そこから流れ出る血が頬をつたる。

「えっとー、おい美鈴！何で俺が闘わなくちゃいけない雰囲気になつてんだよ！」

「知らないわよ！あんた何かしたんでしょう！」

「してない。断じてしてないぞ、俺は！」

とりあえず話を美鈴にふつてみるが、美女は動く気配はない。いや、先程頬に傷を負ったときも、彼女は動いていなかった。体を動かさずに相手を切りつけられるような能力。それも、こちらが動くときと切り刻まれる仕組み。

不用意には動けない。

そう確信したとき、金髪美女の方からナイフが飛んできた。

「ちょ、これ動かなくちゃいけないね！？ちょっと美人さんそれはひどいぜ。いたぶって殺すの趣味だつたりする！？」

なんて聞きながら、彼はナイフをよけようとする。ヒュン、と音を立てて飛んできたナイフはよけた。しかし今度は左腕が深く切れていた。

「つつう……」

彼はちいさい悲鳴をあげながら、深く切れた腕に目をやる。細い傷跡が残っていて、肉が多少なりともえぐれている。その上、血が垂れ流れていた。

何なんだ？こちらが動くときと切れるような能力？カマイタチ……は強い風が起こるからありえないし……。細くて頑丈で、その上深く切りつけられるもの……。だああああああ、わかんね。細くて細い？彼は何を思ったのか、もう一度、傷口をしっかりと見つめる。

細くて、真直ぐでくつきりとできた線。

もしかして……。そう考えていると、ナイフがまた投げつけられてきた。

「そういうことかよ……」

彼はニヤリと笑んで、自分の体の前にゆっくりと手を挙げる。
傷は……つかない。

それを確認すると、近距離に来ていたナイフを軽々と素手で叩き落とした。

そして同じ状態で動けずにいる美鈴に向かって叫ぶ。

「美鈴！お前の拳銃オリハルコンだったよなあ！」

「そうだけど……」

「ちよつと貸せ！すぐに返すから！」

彼は少し笑んで、言い放った。

すると美鈴は彼の笑みになにかビビッときたのか、素直にわかったわと言っ、拳銃を投げる。

「……っし。じゃあ、反撃といきますかっ」

彼は一人呟いて、オリハルコン製の拳銃を振り回す。

所々腕や体に傷がつくが、今はそんなことを気にしてはいられない。
そしてやがて振り回すのをやめると、腕から垂れる血を、拳銃につける。すると……

「これが正体だろ」

「……くっ」

血で赤く染まった、細い糸が姿をあらわにする。

そして銃口を美女に向けて、容赦なく彼は撃った。
ガンッ

銃声を響かせて、弾丸が美女に向かっていく。

「くそつ」

美女は小さく毒づいた。

そしてうつむいた……と思いきや

「なんてな」

言い放ち、腕を挙げる。そして指を起用に動かし、糸で弾丸を巻き取った。

「おいおい、そりゃねーぜジョニー」

美女の綺麗な糸さばき（？）によって綺麗に巻き取られた弾丸は、コロン、と地面に落下した。

さすがにそこまで予想していなかった俊也は冷汗を額に流しながら、美女を見据えた。

すると美女は弾丸を落とした状態のまま、糸先が美鈴に向かって飛んでいく。

「美鈴！」

叫びながら俊也は拳銃を投げる。が、届くのが遅い。

今だ糸が辺りに張り巡らされている美鈴は動くこともできずに……。

「くそつ。『<<<第一リミッター・解除>>>』！」

咄くと同時に、彼は普段の彼では到底できないような速さで走り出す。

もうすでに美鈴の目の前にいる美女は、美鈴に向かってフェイントを仕掛けていた。

美鈴はフェイントにかかることなく、ギリギリで受け取った拳銃で美女を殴り飛ばした。

「がああ……っ」

うめきながらこちらに向かって吹っ飛ぶ美女。

それを見て俊也は「は？」と、一瞬思考停止したが、すぐに我に返り、飛んできた美女の首に蹴りをいれ、今度は空上に向かってただ美女に上からかかと落としを腹部にくらわせる。

「ぐ……あ」

小さくうめき、地面にたたきつけられた美女。

それをジーツと見ていた美鈴に、俊也は怒鳴る。

「何で最初手え抜いていやがった！しかもこのフェイントかわせません、みたいな行動しくさって！」

そう、彼女は一人でも軽々と美女を倒せるだけの力を持っていた。俊也が叫ぶのに対して、美鈴はつつけんどんに言い放つ。

「だってあんたの実力見たかったんだもの。仕方がないじゃない」「ガッテムムウウウウッ！」

わけのわからない叫びを上げて、彼は頭を押さえ込む。それを見てクスッと笑った美鈴は、

「まあ、戦いに参加するように敵を動かしたのは悪かったわ。でも、なかなかあんた本気出そうとしないし。むしろ「俺関係ない」とか言って逃げようとするんだもの。こっちも困ったわよ」

「んだよ！あー、やっぱ参加しなきゃ良かった。参加なんてしたから」

「でも、なかなかの実力ね。本気を出せばもつといける。なぜあんたが制御しているかはわからないけど……」

「ん、なんか言ったか？」

「なんでもないわよ」

「あ、そう」

俊也は美鈴の策士っぷりに尊敬を通り越して怒りさえ覚えながら、夜の街を歩き帰った。

騙されたぁあああ！（後書き）

うわ、戦い終わっちゃいましたよ。どうしよう……。

お気に入りに入れて下さった方、どうもありがとうございます。

自分も飽きられないよう頑張りますので、よろしく願いしますww
感想や評価をいただけると幸いです。

学園長

「ゴホッ、があ……ゲホゲホッ」

彼は誰もいない暗闇で、苦痛に耐えていた。咳とともに吐き出されるとす黒い血のかたまり。体のきしみを感じながらも、彼は苦笑する。

「一分も解除してねえのに、副作用はあるんだな……」

なんて呟きながら、アパートの壁に手をつき、彼は苦しそうに息を潜めて吐血する。

ああー、やっぱりあの時リミッター花序しなきゃ良かったな、なんて彼は先ほどの戦いを思い出しては思った。

数分たち、少し痛みが治まってくると、彼は口元についた血を腕でぬぐい、自室へと戻った。

暑い……。
無性に暑い。

何か火のかたまりのようなものが体の近くに密着させられている感じがする。
体が、水分をほしがっている…。

「……俊也さん」

心なしか、俊也を呼ぶ声も聞こえ始めた。
そろそろ死に時だろうか？なんてことを俊也は考える。

「俊也さん、起きてくださいっ」

いや、これは完全なる死に時の警告なきがする。
俊也は開きたくないまぶたをうすうすく開いて、声をかける人物を見る。

「……あ、起きました？」

「……イエ、まだ寝ています」

……見たく無いものを見てしまった。
いや、いつもの朝は見ていても別に不可解でもなんでもなかった。
しかし、今日は少し違う。
なんというか……その……彼女の笑みが、いつも以上に恐ろしい。

そしてその理由がわかっていて自分も恐ろしい……、なんて彼は考える。

原因は簡単だ。

まず、美鈴という名の美少女が彼の部屋で寝泊りしていたこと。次に、彼ら二人とも、体に少なからず外傷を負っていること。あとは……。わからん。

「俊也さん、そろそろ起きてくれないとこげちゃいますよ？」

「おはようっ」

「はい。おはようございます」

瞬時に起きた俊也の前にはもちろん火の玉と一緒に悠里が笑みをいっそう深くして座っており、その後ろでは目泳がせている美鈴の姿があった。

「で？どうしたんですか？」

「えっと……どうしたと問われると……なあ？」

「ちよつと、何でこつちに話題をふるのよ。……さあ？」

俊也が美鈴に話題をふる。美鈴は最初俊也にしか聞こえない程度の大きさで俊也に文句を言い、その後あさつての方向を見つめてなにがなんだか、みたいな表情で言う。

それに悠里の笑顔は恐ろしく美しいものと変わり、彼らに向かって言う。

「とにかく、今日は時間がありません。学校から帰ってきたら後々尋も 教えていただければ結構です」

「え、今尋問っていわなかった？言いかけたよな!？」

「気のせいです」

「……そ、そうですね」

悠里の笑みに圧倒されながらも、三人は登校した。

やっとのことで悠里から逃れると、彼らは重いため息をつきながらDクラスの扉を開けた。

そこには

「「げっ」」

二人の声が重なる。

クラスはいつもよりも微妙な空気が流れていて、妙だな、なんて思いながら扉を開けたのが運のつき。

目の前には、黒髪ロングのババア……学園長がいたのだ。いや、実際には30歳らしいが、彼らは彼女のことをババアと定着させている。

「げ、とは何だ。げ、とは。せっかくアタシが自ら赴いてやったとおもむ

言うのに」

なんて、軽い口調で学園長は言い出す。しかしそれに二人は

「来なくていいわっ！！」

シンク口度100パーセントのような見事な重なりっぷりで叫んだ。

実を言うと普通の高校を受験しようとしていた俊也を無理やりこの学園に入れたのもこのクソバ…学園長なのだ。しかもこのクソバ…学園長との出会いは最悪なものだった。

それにくわえ美鈴もこの学園長やその旦那と何かあって家出したのだろう。

つまりは二人にとって嫌な人物この上ない。

「つれないねえ……せつかく旦那に頼まれた『あれ』を用意したと言うのに」

「本当！？」

あ、食いついた。

ってか、『あれ』ってマジでなんだよ！？なんて心の叫びも聞いてもらえず。

それを見ていた坂上や信条は学園長のほうへ歩み寄って、

「学園長、お久しぶりです」

まず、信条が挨拶する。

それにふむ、なんてなんともババア臭い口調で返事を返す。

その後珍しくというか、絶対ありえなさそうな行動を坂上がとった。

「クソバ……学園長。お久しぶりです」

なんていいながら、笑顔で握手を求めたのだ。
それに学園長は露骨に繭を潜めながら

「クソババアとはいい度胸じゃないか。握手して、それからどうするんだい？年齢早めて殺してどうするんだい？ええ？」

「ツチ」

「舌打ちしてんじゃないよっ」

学園長の突っ込みももうしおれたな、なんて裏でこそそと話すクラスメイト達。

この学園長は意外と慣れ親しみやすい、なんて理由で生徒受けは良い。しかし学園長に何かしら恨みのある奴も多く、そういった連中からは嫌われている。

ちなみに俊也、信条、坂上はもちろん後者。

そしてその言葉を聞いて繭をよけいに吊り上げながら俊也、坂上、信条、美鈴に向かって告げた。

「実はあんた達にやってほしい依頼があつてねえ」

「「「お断りします」「」「」」

「……………」

一致団結。

このまま断り続ければよかったのだが

「美鈴、この依頼を受けたら『あれ』を増やそう」

「やります!」

一人撃沈。

「坂上、依頼主は若くてたいそうな美人だぞ？」

「お受けします」

┌
┌
.
.
.
.
└
└

だめだ。勝てる気がしないっ。

……いや、まだ信条が残っている。二人でなんとか
と彼が思

「藤堂、受けなければ悠里にあること無いこと……」

「全力でやらせていただきます！………っ、しまったあああああ
あああ！俺が落とされたあああああああ！」

不覺……。

こっそりと信条の方を見ると、やれやれ、と言ったような表情で苦笑していた。

そして最後に学園長が信条の耳元で何かを耳打ちして……

「……学園長も人が悪い。それでは僕はやらなくてはいけなくなるでしょう?」

$$\begin{array}{c} \neg \\ \neg \\ \neg \\ \neg \\ \vdots \\ \neg \end{array}$$

なんて、話がまとまってしまった。
恐るべし、学園長。

帰国子女！？

依頼。

それは簡単なものだった。

今日転入してくる帰国子女を、三日間校内の案内や言葉の世話をする　と、いうもの。

学園長もそういえばすぐに俊也たちは納得したものの、ただお願いするのはしゃくだったそうだ。

それにまともに外国語を話せる美鈴と、人間関係の良い信条は必須で、そのおまけに俊也と坂上も巻き込んでやろう、程度の考えだったらしい。

「くそつ。あのババアめ……！」

俊也と坂上は同時に毒づいた。

「坂上、今度あのババアに会ったら思いっきり握手……いや、抱きついて来い」

「抱きつくのはイヤだが、あのババアの息の根止められるんならやつてやるよ。最速で生命を早めてさっさと寿命尽きさせてやる」

「頼もしいな。初めてお前を良い奴だと思ったよ」

「ふっ……」

なんて彼らは馬鹿げた会話をする。

しかしその瞳には確実に遂行するという信念によって毒されていた。
絶対に殺す！と彼等が呟いていると。

突如、教室の扉が開き、黒川が入ってくる。

「今日は転入生を紹介します」

その言葉に、きゃああああああああっ？なんていう女子の
雄叫び（？）があがり、質問攻めとなる。

「転入生は男？女？」

「女性ですよ」

「どこから来たんですか！？」

「なんと、帰国子女だそうです」

「どんな子？」

「金髪の大人びた方ですよ」

「きゃあああああああああ！！！」

おいおい、今のどこに叫ぶ要素があるのだというのか。

しかしそんな俊也の心の疑問は誰にも届かず、黒川が入ってきたこ
とによって不機嫌になっていた男子共も『帰国子女の金髪』という
言葉に舞い上がっていた。

「入ってきてください」

黒川のその言葉と同時に、入ってきた金髪美女　　って、はい？

そこには淡い緑色の超凜学園の制服を着た、先日闘ったばかりの金
髪美女だった。

彼女は黒板に綺麗な字で『田中』と書き出した。なんとも平凡な名

前だ……。

そしてその田中の下にカタカナで『ソフィア』と書き、クラスを見回す。

「初めマシテ。田中ソフィアと言います。どうぞよろしく」

少し片言で、綺麗な大人びた笑顔をまわりに振りまいた。そして自己紹介が終わり、クラスの拍手が鳴り止むと

「じゃあ、ソフィアさんの席は あ、ちょうどあそこがあいてますね。藤堂君の隣で」

「はい」

そういつて俊也の隣まで来たソフィアは、彼の顔を見るとあからさまに顔を引きつらせ

「よ、よろしくお願いします」

彼女は初めまして、なんていつてきた。あくまで他人のふり、か。

そう確信した俊也は少し意地の悪い笑みを浮かべて

「初めまして。よろしくな、美人さん」

ガンッ!!

突如、ソフィアは俊也の胸倉をつかみ、

「貴様！私を愚弄するのか!？」

叫んだ。

シーツンとなつたクラス。

それにハッと気づいて、ソフィアは気まずい雰囲気で

「えっと……毛が、ついていましたヨ？」

「いつ……サンキュ」

ブチッと俊也の毛を抜くと、皆に見えるように毛を高く上げた。

そこまでするか……、と彼は内心美人さんと言ったことに公開しながら、色々を考える。

まあ、しかし、この美人さんがまさか同い年だったとは思わなんだ。これから色々大変そうだ、なんてなんとも親父臭いことを考える俊也だった。

俺関係なくないですか!?

ソフィアを坂上、信条、美鈴、俊也の四人で校内を一通り案内した後坂上と信条が用事で何処かへ行ってしまったので、俊也たちは彼女のリクエストを聞くことにした。

「あと、どこか行きたい所は？」

すると彼女はぶっきらぼうに

「誰も来なくて三人で話しのできる場所」

なんて指定してきた。

それに一瞬俊也と美鈴は顔を見合わせ、相談室へと足を運んだ。

相談室。

そんなのは名ばかりで、ただ無駄に良いソファが二つおいてあり、テーブルが一つ。

あまり人も入らないので少しほこりっぱいただの部屋である。

その部屋の窓を少し開けて換気すると、すぐにほこりっぱさは薄れた。

そのソファに三人が座り、ソフィアの話聞く。

すると彼女は深刻そうな顔で

「率直に言う。貴様達は狙われている」

「……………」

いや、確かに率直だけど…、なんて彼は思う。

しかし美鈴は何回も狙われていたからなんとなく狙われているのはわかる。理由は知らないが。

でも、俊也が狙われる理由がないのだ。

「えっと…美鈴は狙われている、の間違いじゃないのか？」

「ああ。貴様達、だ」

「…………… なんだ。俺狙われる覚えが全く言って良いほど皆無だぞ

！
」

「なにを言う。貴様は私と戦ったであろうが。それにあの赤髪の女とも。二回も自分の組織のものと美鈴を守りながら闘われたら敵視する。誰かが闘うときは……そうだな、社員辺りが監視しているのだ。美鈴と闘った十三人が下っ端なら、私はアルバイトだ。アルバイトが負けたら、仕事に慣れたアルバイトか、社員見習い辺りが出てくるのは当然だ。次は私よりも強い奴がお前達二人を襲う」

「お前のせいかなぁああああああっ！！お前等が俺を巻き込んだから俺のライフがめちゃくちゃになったんだろうが！」

俊也は思いつきり叫ぶ。

しかしそんな叫びは相手にもされず、女子二人が話しこみ出した。美鈴はソフィアと同じくらい深刻そうな顔つきでソフィアに問う。

「ソフィア……。あなたは何で生きてるの？奴らは使えない奴は皆殺しにすると聞いたわ」

「決まっているだろう。逃げてきたんだ。つまりは組織のことを少しだといえ、知っている私も標的に当てはまっている。でも私にはやるのがまだ残っている。絶対に死ねない」

「死亡フラグじゃねえか！………ってか、最終的に俺巻き込まれたただの凡人じゃね？話せばわかって」

「くれない（わ）」

「……………ですよねー」

そんなことを話し、最終的にはずっと追われていた美鈴に加わり、逃亡者のソフィア、そしてなぜか巻き込まれただけの俊也もソフィアの所属していた組織に追われるはめとなった。

彼女はその後、辺りを注意深く確認しながら、組織のことを話そうとすると、

ヒュン

と、音を立てて彼女の綺麗な金色の前髪が切れた。

「……………他言無用らしいぞ」

「……………ああ」

「でも、今のは見えなかったわ。どこから攻撃を……」

美鈴がそういつて窓の外を見る。

しかしそこには誰もいなくて。

それであー、めんどくせえ、何で俺が巻き込まれなくちゃいけないんだよ、なんて彼は考えながら扉のほうを見ると、一瞬、ほんの一瞬だが、何か物陰が動いた気がした。

それに彼は、ソフィアの組織の奴だったら非常にまずいなあ、と思う。

しかしこちらに姿を確認されるような奴だったら、幹部とか、社員じゃねえんだろなあ、と彼は思う。そして思ってから今度は上から視線を感じて、上を見上げる。

しかしそこにあるのはただの天井で、他に変わったところなど……………

「あ」

「どうしたの？」

「……………」

あった。

唯一変わったところがあったことにいろんな意味で彼は驚く。

天井の隅から変なバズーカ砲みたいなのがちよつとだけ飛び出ていることに彼は驚く。

耳をすまえると盛大にバシャバシャパシャパシャバシャパシャなん

て、カメラのシャッター音が聞こえてきて。

「うおい！そこで何してんだああああ！？」

俊也の叫びに美鈴たちは一瞬びつくりしてこっちを見つめる。

天井のバズーカ砲みたいなカメラと思われる者を抱えた人物も、彼の声に一瞬ビクウっとして、またバシャバシャパシャパシャパシャ、なんて小さな音を立ててシャッターをきりまくる。

我知らぬ、を通し出した人物に若干感服しながら彼はもう一度

「その天井にいる奴！」

と、声をかけると、ススーーーーッとかメラが天井に隠れていつて……。

「逃がすかああああああ！！！」

彼は叫びながら天井の微妙な隙間に目をやる。

しかしそこにはもう誰もいなくて。

その行動からして、あまり危険人物ではないんじゃないかな、なんて彼は思う。

そして、人は見かけによらないと思い直し、相談室の扉を開けて廊下を見渡すが、誰もいなくて。

仕方がないので美鈴やソフィアの方へ目をやると、ソフィアは何一人で騒いでるの？見たいな冷たいまなざしをこちらに寄せ、それに反して美鈴は視線を逸らし、ププツとか声をもらしながら笑いを必死にこらえている。

「おい美鈴。お前気づいてんだろ？」

「フフフツ……え、何が？アハハハハッ」

「気づいてんじゃねえか！何一人で笑いこらえてんだよ！？」

「くく……ひつ……だって……盛大に叫んだってあっちが顔出すはずないじゃないっ。気づいてません、知りませんっていう感じのオーラ出しておけばいいのよ」

その言葉に、気づいていなかったソフィアが

「そうだぞ。お前は頭がかたいな」

「お前は気づいてなかっただろおがあああああああつ！？」

なんて叫ぶはめになって。

その日俊也の喉はいつも以上に痛かった。

視線

「……………」

俊也は、無言で校舎を歩いていた。

パシャパシャパシャパシャ。

「……………」

無言で、視線とシャッター音に突っ込みそうになる自分を必死に我慢させていた。

彼が歩くと視線の主は一定の距離を保ったままついてまわ、彼が止まると、視線の主も止まる。

そのため彼は不自然じやないように止まったり歩いたり、知り合いと話をしたりを繰り返しながら、校舎を歩きまわっていた。

なぜかこの人物は気配を完璧に消しているわりには、カメラが簡単に見つけられる。

しかしカメラを見つけても、この人物の体は見えない。ある意味すごい奴なのかもと、彼は思う。

そしてまた無言、彼は歩き始めようとする。

「……………」

そう、無言で……。
無言で……。

「だああああああああ！もう無理！絶対無理！おいそのカメラ野郎でてこい！」

叫ぶように言うと、ビクウツツ！とカメラが一瞬動いて、ススーっとさがっていく。

「うおい！」

呼んでも、彼……か、彼女かもわからない人物は、逃げ腰にさがっていく。

何日も彼はこの視線とシャッター音に耐えてきたのだが、まあーお限界だ、死んでもコイツとっ捕まえてやるうううううううううううう！？

とか、彼は心の中で叫ぶ。
叫ぶついでに賭けにでた。

「俺の写真好きだけ撮っていいから話をさせる！」

はたから見ればただのナルシスト。

実際彼はこれを言おうか言うつまいかを考えて、何度かチャンスをつたのである。恥ずかしさに。

カメラを持った人物は彼の言葉を聞いて数秒停止し、さっと木の陰から出てきた。

淡い緑色のカールのついた短髪に、細身の体。
彼よりも、年下だと思う。

なぜか背中には長い射撃銃が携えられていて。

彼女は無表情な顔でこちらを見上げ、

「自惚れないで下さい。私は別に写真に釣られたわけじゃないですから。友好的に話をしようと思っただけですから」

なんて凜とすんだ声色でいいながら、カメラを構える。

そしてパシャパシャパシャパシャと、シャッターをものすごい勢いできりだした。

「思いつきりつられてんだろがあああああああああつ！」

叫ぶが、彼女は無表情のまま写真をとり続け、返事をしてくれない。

だあああああ、めんどくせえ。これじゃあ話どころか盗撮されて終わりじゃね？そんなのありえねええええええええ、俺の勇気を返せ！とか、彼は考える。そしてこの状況を打開できる策を考える。

「……………！」

策を考えるが、なにぶん彼の頭は策士用に作られてはいないのだ。

まあ考えていても一生答えは出てこなさそうなので彼はとりあえず質問をする。

「名前は？」

すすはら
「鈴原……………郁いく」

返事が返ってきた。

先程言った『撮らせてやるから話をさせる』という言葉を守って
てくれているらしい。

とりあえず質問攻めにしたことにした。

「能力は？」

「秘密」

「何で俺の写真を撮る」

「必要だから」

「なぜ」

「秘密」

「……………スリーサイズは？」

「上からななじゅ」

「わあああああああつ！いい！言わなくていい！」

「？あなたから聞いたんじゃないですか」

「いや、いい。聞きたくない。聞いたら俺、男として色々と失う気がする。周囲の信頼とか」

そっぴいながら、周りを見回す。

なぜか聞き耳を立てて殺気立っている男子が多いのはたぶん彼のせいだろう。

彼女もあるいみ爆弾女だ。

無表情

彼は、大きく深呼吸をしてから鈴原郁……彼女に言った。

「……とりあえず、お前の行動はなに？」

「隠密行動」

「すっかり気づかれてんじゃねえかああああああああっ！もう隠密じゃねえよ！しかも無駄に気配の消し方上手いのには体見えてたら意味ねえだろうがああああああああっ！！！」

はあ、はあ…。

ひとしきり叫んだところで彼は周囲に目をやる。

なんだコイツは。

何独りで叫んでるんだ。

うわ、キモ……。

なんてことを周囲にいる人が目で語る。

言葉に出したりしないぶん、よけいに痛い。

「　　ぐう… ああー！もう！こっち来い！」

彼はなにやら考えた後、郁の細く白い腕を引っ張り出した。不意の出来事で、彼女の淡い緑色の髪が揺れる。

それを見た周囲の視線が、きつくなる。

もう、

あいつ女の子を無理やり連れてどこへいくき!?

あんな美少女に何をする気だ!

くそう、あの男は何を考えているんだ。あの美少女を……まさか強姦!?

……なんて言葉が目線だけでおくられてくる。
もう痛いなんの。

「ここから消えてしまいたい」

俊也は小さくうめいて、その場から逃げるように……いや、逃げた。

「で。周囲の目線が怖くて私のところへ連れてきたと？」
「おっしやる通りです」

ふわっとした水色の長い髪を今日は二つに縛った彼女、美鈴^{ミレイ}は腕を組み、正座して面目ない、と付け足す彼と、彼の隣に右手をつないだまま　　というか、つかまれたままの淡い緑色の短髪カールの少女に目をやる。
ずっと無表情。

そしてあいている左手でカメラをいじりまくっていた。たまに腕が背中の射撃銃とぶつかり、カチャと音を立てる。

俊也の方を見ると、彼は目でどうかしてくれ！とコールを送っていた。

それに彼女は大きなため息をつく。
そして彼女は小さな頭にたくさん詰まった情報を探し出す。

鈴原郁。

14歳。

つねに射撃銃とカメラを持ち歩く、射撃の天才。
気配の消し方も一流で、一度狙った的を外したことはないんだとか。
しかし気配の消し方は一流でも、自分のもつカメラを上手く隠さないことが玉に瑕^{たまきず}。

そんな彼女が、どうして俊也に付きまとい、彼の写真……つまりは情報を集めようとするのだろうか。

美鈴はマジマジと郁を見据える。

その視線に気づいた郁が美鈴を見据え、

「……………あ。もしかして、美鈴……さんですか」

なんていう。

それに美鈴と俊也は

「「気づくの遅っっ!?!」」

同時に叫んだ。

無表情（後書き）

長らく更新していなかった割には短めです。
申し訳ない……。

じじじ、次回にご期待！？（泣）

摩訶不思議

「……………あ。もしかして、美鈴……………さんですか？」

「……………ええ、まあ」

美鈴が渋々答えると、今度は無表情だった郁の繭がピクッと一瞬だけ動いた。ただ俊也の見間違いかもしいないが。

俊也はずっとなれない正座をしていたために、さすがに痺れてきた足を崩し、立ち上がる。

その際になぜかつかみっぱなしだった郁の手を離した。

あれ？女の子と手つなぐとか何年ぶり？うつわ、さりげなくハードル高ええええええ、とか、彼は内心ちよつとウキウキで立ち上がる。すると彼の心を読んだのか読んでいないのか、いや、絶対読んだぞお！って叫んでもおかしくないような、鋭い目つきで美鈴は俊也を軽蔑した。

「……………すみません」

「よろしい」

なぜか彼はその鋭い目つきを送ってくる美鈴に対して謝る。

そんな二人のやり取りを見ていて、郁は無表情でこんなことを言い出した。

「仲、いいんですね」

今のどこを見ていれば仲がよいという発想にありつくのだろうか。郁の思考回路はわかりやすそうでわからない。

いや、もう全然わからない。

そんなことを考えているうちに始業のチャイムがなり、彼女は「では、これで」と言いながら自分の教室に戻るため、部屋を出た。背後の部屋から

「授業始まつちやったじゃないの!」

「え、それ俺のせいじゃなく…ぎゃあああああああ!」

なんて仲の良いセリフが聞こえてくる。何をしたのだろうか？

彼女は首に下げたカメラで撮った写真を見る。

今日撮った写真。

藤堂俊也の写真。

そして先程部屋で撮った写真。

デームン・R・美鈴の写真。

彼女はその二種類の、あらゆる角度から撮った写真を見て、無表情だった口元を少しゆるませ、呟く。

「これで、彼らに私が負けることはありえない」

「えー悠里さん？」

彼は言う。泣きそうな声で目の前にいる、すでに泣き始めてしまった桃色のやわらかそうな髪を二つに縛った女性に言う。

「う……ひぐ……待ってって、言っただじゃないですかあ……」
「いや、本当にゴメン……えっと……携帯、見てなくてさ」

彼はとっさに思いついた言い訳を使うが、

「直接言っただのになんで携帯なんですかー……」
「……………」

玉碎。

いや、だつてさ？

別に忘れていたわけじゃないんだぜ？記憶にないって言うか、なんというか、俺に非はない！断じてないぞ！なんて彼は心の中で本音をぶちまける。

しかしそれを今の状況で彼女に言える勇氣なんて素晴らしいものは俊也にはなくて。

あー、もう、そろそろ俺死ぬかも。とか、彼は夢現^{ゆめうつ}の状態を考える。

「ひどいですよ……」

「いや、俺には愛する妻子が家で待ってるんだ……」

あ、今死亡フラグ立てた。

絶対戦場で言ったらいけないパターンの言葉を言い訳に使ってしまった……

「ごめ、今の冗だ……」

そんな彼の撤回を聞かずに、悠里は左手に、青い炎を作り出した。青い炎。それは温度が高いことを証明する色。炎を使える能力者は多数あれど、高温の炎を作り出せる能力者は少ない。彼女はその炎を手で丸く固め、うるんだ瞳を見開きながら彼女は叫んだ。

「さ、妻子……。お相手は誰なんですかー！？」

「だから違つぎゃあああああああー！」

そんな叫び声がこだまする。

しかしそんなお気楽な日常が、途端に消えてしまふことになるとは思わなかった。

怪しい轟

夜中。

俊也は小さなボロアパートの一室で熟睡していた。
もちろん、デイムン・R・美鈴も同じ部屋で。

俊也は熟睡している。白い、胸元にFIGHT!と書いてあるだけの半そでに、短パンというラフな格好で。

しかしそれに対して、美鈴は違った。

水色のやわらかそうな髪をキツチリと二つに縛り、超凜学園の制服を着て、身構えていた。

超凜学園の制服。

それは淡い緑色のチェックの上着に、濃い緑色のスカートやズボン。まあちよつと趣味は悪いが、防弾の役割もはたしている特性素材。

意外と能力にも強く、それなりに強い術でないかぎりはこの制服を貫通させることはできない。

といつても、所詮は制服。

ちよつと手だれた人間に銃弾ぶち込まれればすぐに穴があく。が、普段着のように柔らかい素材よりも断然ましだ。

彼女はそんな制服を着て、身構える。

ベッドの中に身を潜め、気配を感知しようとする。

もう少しで夜中の二時。

あと五、四、三、二、一……………。

バリイン！

突如、部屋の窓ガラスが銃弾によって割れた。

「なんだなんだ……ってなんだこりゃあああああ！？なんでまた窓割れてんの！？せつかくおばさんに言っただけ許してもらったのにいいいいいいいい！！」

彼は、飛び上がってから、割れた窓の破片を見て叫ぶ。

あらん限りの力で叫ぶ。

それはもう、お隣さんから「うるさいよ！」って壁をたたかれるぐらいに。

しかしまた、彼が叫ばなくてはいけない状況に持ち込まれる。

バン、と小さな発砲音がして、彼の左目めがけて小さな銃弾が飛んできたのだ。

「嘘おおおおおおおおお！？」

「いいからっ、早くよけなさい！」

「ぐほお」

なんて微妙な会話を成立させつつ、美鈴は俊也の体を強く押した。そのため、俊也の左目はえぐられずにすんで。

やべえええええ、これやばすぎだろ！？なんでこんなことになんつてんだよ！とか、彼は口ぱくで叫んでみる。

しかしそれに返事をしてくれる人はいなくて。

そしてすぐに美鈴は体勢をなおし、ソフィアに襲われたときと同様、俊也の手をつかんで走り出した。

カチャ。

小さな音を立てて、彼女は身構える。

満月の夜。

その逆光をあびながら、淡い緑色のクセツ毛の少女、鈴原郁はかまえる。

彼女は首元から常日頃構えているカメラをぶら下げて。

両手にはいつも背中に携えている長い射撃銃を持ち構えて。

彼女は呟く。小さく、か弱い声で呟く。

「逃がさない。私の獲物ターゲットになって逃げ切れた人はいない」

彼女は、小さく呟く。

いつもの無表情で。そっけなく。

しかしその瞳は何かに揺れていた。

それが月の逆光のせいなのか、風で乾燥したせいなのか。それとも他の何かがあるのか。

それは今の俊也たちにはわからないだろう。

一瞬ゆれた瞳は、その数秒後には獲物ターゲットを狙う狙撃者のものとなっていた。

怪しい轟（後書き）

展開速いですね……。すみません。

それは置いておいて、報告です！

新作を（少し前に）更新しました！題名は「魔術師の機密」です。

主人公最強系です（またあ！？）すみません。

描写の仕方がちょっとだけ、「Rの称号」とは違います。主人公そんなに叫ばないです。

もしよろしければ、目を通してみてください！ジャンルは冒険です。

FIGHT!

パンッ!

短い、少し高めの発砲音が聞こえると、全力疾走している俊也たちの少し横、厳密に言うところ俊也のFIGHT!とかいてある白い半そでのわき腹辺りをかすめる。

「かすったあああああああ!おい美鈴!俺今日死ぬかも!」

「うるさい!無駄口たたかないで走る!あつちは狙撃者よ。止まれば死ぬわ。それともあつちの正確な弾丸をよけられる技能が今のあんたにある!?」

「ない!」

美鈴の呼びかけに俊也はこれでもか、と思わせられるほどキツパリと即答した。

しかし、狙撃があつてからすぐに部屋を飛び出してきたので、もちろん足は裸足。

コンクリートだけならまだしも、なぜか今はほそうされていない砂利道を走っていて。

「足痛いんですけどおおおおお!?!」

「気にしたら負けよ」

「気にしなくても負けだろうが！」

その点美鈴はしっかりと靴を履いている。

学校に登校するときにはいているローファー！。これまた走りにくそうな選択だが、こちらこそ気にしては負けだ。

住宅街から少しはなれた、周りにはほとんど障害物のない、きれいさっぱりな広場のようなところへついた。しかし地面は今だ砂利という現実には、彼は泣きそうになる。

今度は美鈴、何を考えてるんだ？

というような視線を彼女に送ると、彼女はその視線に気づいて

「自分で考えなさい」

と、ひどく妖艶な、艶っぽい意味深長な笑みを浮かべて言った。

「それ反則うううううううう！？」

不覚にも目を奪われてしまった自分が恥ずかしい！と、小声で付け足す。

そして彼女の言った『自分で考えなさい』という意味について考える。

考える。

考えるのだが、

「ヒント！」

全く彼にはわからない。

それに本当に馬鹿ね、とでも言いたそうな、見下した視線を俊也に送ってきて。

「ガッテムウウウウウウ！？」

また、意味のわからない奇声をあげる。

と、同時に。

ヒュンツと、風を切る音を立てて三発の弾が俊也のわき腹、右足のふくらはぎ、顔面に向かって飛んでくる。

「え、ちょ、俺だけ！？」

そんな彼にしては齒切れの良い叫びをあげ、後ろに後退する。

しかしその行動が飛んでくる弾をよけられるという事につながるはずもなく、

ガシッ。

「なっ。がふうっ！」

美鈴が彼の足に自分の足をひっかけ、俊也を転倒させる。

すると転倒したことによって彼は弾丸をよけることに成功した！

「さ、サンキュ」

「あんた、能力使わないと何もできないわけ？」

「御察しのとおりで」

そのかわり、能力を使った後にもできないがな、と彼は心の中で付け足す。

しかしそれを美鈴がわかるはずもなく、彼女は

「じゃあさっさと使いなさいよ！邪魔！」

「俺を戦いに巻き込んだのはお前だろうが！責任取れや！俺ももうお婿むこにいけない！」

「そんなの知るかああああああ！さっさとよけなさいっての！」

俊也の意味不明な言動にあきれながらも、戸惑いを見せず飛んでくる射撃弾を拳銃ではじく。

そして美鈴は今飛んできた弾丸の線を目で追う。

するとこの広場から少しはなれた、かなり背の高い木が少し揺れている。

「もうあんな所に移動して……。意外と強いよね。さすが、刺客なだけあるわ」

「はあ？なに言ってるんだよ？」

美鈴の言葉に、俊也は首をかしげる。

もう、なにがなんだかわかりません。俺無関係です〜とといったような、たくさんの意味のこもっている表情で首をかしげるのだが、

「いいから集中」

なんていう美鈴の言葉と同時に、腹筋に強烈な蹴りを入れられ、二メートル吹っ飛ぶ。

すると元いた、俊也の場所には狙撃された跡があつて。

「い……おい……いいいいいい！俺たぶん刺客に殺されないぞ！その前にお前に殺されるからなああああああ！」

彼は叫んだ。

砂利に勢いよくぶつけた尻を押さえながら、半泣きで美鈴に叫ぶ。

が、そんな彼には目もくれず、美鈴は少しはなれた一番高い木を凝視していた。

助っ人

俊也は激痛のはしつた尻をおさえながら美鈴が凝視しているこの辺りで一番高い木を見る。

と、そこには月に照らされ、光っているカメラのレンズが見えた。

「あー……犯人わかったわ」

「遅いわよ。もつと早く気がつかないとあんたそのうち死ぬわよ」

「巻き込んだ当の本人が何を言う。あと死ぬの勘弁」

いいながら彼はガラガラと光っているカメラと銃口を見る。

そして周囲を見渡すのだが。

鈴原郁のような弱そうな少女があの一歩高い木に登れるとは思えない。

周りに飛び移れるようなビルもないし。

と、考えているときにバンツツと発砲される。

発砲口を確認していた俊也は少し体をずらし弾丸をよけ、郁のいる木のとっぺんを見据えた。

もう彼女の居場所は二人にばれている。それでもなお、彼女は動く気はないらしい。一歩たりとも動いていない。美鈴はそんな郁を見据え、拳銃を取り出す。

「おい、撃つのか」

「撃たないで私達が生きていられると思う？あつちは完璧に殺すつもりなのよ」

「……っけどよ」

「大丈夫。殺しはしない」

美鈴は拳銃を両手でしっかりと握り、銃口を郁へと向ける。

そして。

ダンッ　　と、短い発砲音が鳴り響く。

真直ぐに、ゆっくりと。

まるでスローモーションビデオを見ているかのように、彼女の弾丸はゆっくりと一直線に飛んでいるように彼には見えた。

そして、郁のほうも。

美鈴の弾丸がゆっくりと、真直ぐに自分の腕めがけて飛んでくるのがわかる。

郁はしっかりと狙撃銃を構え、バンッバンと美鈴へ発砲した。

ゆっくり、ゆっくりと彼女達の弾丸が各々の狙った的へと飛んでいく。

ガキンッ

大きな金属音を立てて彼女達の弾丸がはじかれた。

二つの弾丸の気道がピッタリと重なって、お互いの気道を逸らしあったのだ。

美鈴の撃った弾丸の気道にあわせて、郁が発砲したのだ。

「引き分け……」

いや。待て。彼は考えた。

美鈴が発砲した後、郁も発砲した。

発砲音は二回。

……ってことは！

「美鈴！もう一発くるぞ！」

「へ……」

彼が言ったときにはすでに弾丸は美鈴の目の前にきていた。

「くそっ」

認めざるをえない。

郁は天才だ。

一発目を氣道をそらすのに使い、同じ氣道で陰になるようにもう一発発砲していたのだ。

「『<<<第一リミッター・解除>>>』」

走りながら彼は呟いた。

刹那。彼の走りが急激に速くなる。

一瞬で美鈴の脇にきて、彼女を思いっきり押す。

ズサアアアという嫌な音を立てながら美鈴は砂利道の地面に転等した。

しかし俊也は目の前に着ている弾丸に目をむけ、少し体をずらそうと試みるが、時すでに遅し。

彼は目を閉じて、両腕を目の前にクロスさせるように上げたが。

いくらたつても弾丸は自分に当たらなかった。

目を開くと自分の目の前に二つの弾丸と思われる、半分に切り裂かれたようなものが転がっていた。

「は……？」

俊也は間抜けの声をもらしながら、辺りを見渡した。

登場

辺りを見渡すと、月の光で輝く、何本もの細い糸が張り巡らされていた。

動いたら俊也まで切れてしまうほどに。

こんな悪趣味な助け方をするのは一人しかないだろう。

「おーい、田中さんやぁーい」

そう、田中ソフィア。

田中という名字には疑問を覚えるが、そんなことを言っでは全国の田中さんに謝らなくてはいけない。

彼は内心ほっとしながらも、ソフォアの姿を探す。

「気安く呼ぶな」

そっついながら出てきた金髪美女。

なぜか超凜の制服を着たままで、全身がびしょぬれだった。

「えっと、どうしたんですか？」

彼女の制服は淫らに乱れ、夏服と言うこともあり、ぬれた制服からくっつきりと彼女の下着が

「貴様！ どこを見ている！？」

「いえ、どこも見てません！ 別に田中さんの下着がクマさんでも俺は気にしなきゃああああっ！？」

「「こんの変態があ！」「」

同時に美鈴とソフィアから攻撃を受け、うずくまる俊也。
これに関しては自業自得だろう。

そんなことをしているうちに、俊也の様子が急変する。

「ぐ……っほっ、があああ……っ」

必死に押さえ込むように口を両手で覆い、苦しそうに呻きだした。

「え、ちょっと！？ どうしたのよ？」

砂利に方膝をつけていた美鈴は俊也の変化にいち早く気づき、駆け寄ってくる。

「そこまで強く殴ってないでしょう！？ そんなに痛かったの！？」

違う、と俊也は思う。

しかし口が動かず、体がきしむ。

ついには口から血が流れ出てきた。

「っほっ、が……っほっ」

吐血は一向に収まらず、心配そうな表情で美鈴とソフィアは彼を見つめた。

と、同時に。

郁も銃を通して彼らの行動を見ていた。

いきなり苦しそうにうめきだし、吐血した藤堂俊也。

それにあせる二人は、彼の存在をあまり深く知らないようだ。

しかし、彼女は知っていた。

彼女の属する組織が、美鈴の件とは別に、藤堂俊也という人物に監視を置いていたのを。

まさか美鈴と合流するとは思っていなかったが、それでも美鈴を捕獲成功し、彼の能力を組織のものにできれば上々だと、郁の主は言った。

その主に有無を言わず従うのが僕の役目。^{しゅも}
いくら、僕となった理由が脅迫でも。

郁への舞令は三つ。

ディームン・R・美鈴の捕獲。

藤堂俊也の監視。

田中ソフィアの抹殺。

主はこうも言っていた。

今のところ藤堂俊也が暴走する可能性は低い。監視は続けてもらうが、最優先事項は田中ソフィアの抹殺と、ディームン・R・美鈴の捕獲だ、と。

郁は主の言葉を思い出しながら、銃器を通して狙いを定める。

まずは、田中ソフィアの抹殺。

組織の情報が漏れる前に始末をする。

郁はかまえる。

銃口をソフィアの胸、心臓へと向け　発砲した。

バンッ

短い発砲音が静まり返った空に響く。

それにいち早く気づいた俊也は、きしむ体を無理やり動かして起き上がる。

動かないはずの体を無理やり動かすのだ。

そして、一度は命を狙われた相手とはいえ、今回は命を救ってくれた恩人を突き飛ばす。

もちろんまだ『第一リミッター』は解除されている。

眼にも止まらぬ速さで動き出した彼を、この場にいる全員が捕まえることができなかった。

美鈴にはかろうじて見えた、彼の残像。

しかしそれを見つけたときには俊也はソフィアを突き飛ばしていて、そのうえ手刀で弾丸を打ち落としていた。

そして、崩れるように意識を失う。

相当辛かったのだろう。

それを見て、美鈴は確信した。

この男ならば大丈夫、と　　。

戦闘（前書き）

作者に専門的な知識はありません。

戦闘

藤堂俊也が気を失って数秒。

二発目の弾丸がソフィアを襲う。

郁は容赦なく彼女の頭に狙いを定めていた。もちろん突き飛ばされたソフィアは急に倒れた俊也を見ては困惑している。

しかし狙いが自分にかわったことによって、彼女の頭は俊也のことをめかせばスッキリしていた。

彼女の言い分で言うと「所詮アルバイト」だが、彼女を郁が狙ったということは、その「所詮アルバイト」も組織の秘密を知れば、または任務遂行できなければ抹殺という命が下る、と言うことを教えている。

美鈴は郁への命令に『ソフィアの抹殺』もあることを改めて知り、糸を起用に使いこなし弾丸をはじいたソフィアを眺めるように見ていた。

そして俊也のほうへ視線を動かすと、美鈴は目を見開いた。

「なっ……!?!」

砂利のうえを裸足で走ったり、勢い良く滑ってできた無数のかすり傷　主に美鈴が無理やり引っ張りまわしたせいでついた傷だが、
が、跡形もなく消えていたのだ。

しかしそれに気をとられていたのも一瞬。
今度は標的が美鈴へと変わった。

『戦場では一瞬の迷いで命を落とすことになる』

それは超凜学園の理事長が言った言葉だ。

彼女がまだ、その艶やかな黒髪をポニーテールにしていたくらい若かった頃、幼少期だった美鈴に伝えた言葉。

その言葉のおかげでここまで生きてこられたといっても過言ではないくらい、美鈴にとって理事長の存在はかなり大きかった。

一瞬にしてスイッチが切り替わる。

美鈴はそのフワリとした水色の長い髪をたなびかせながら華麗に弾丸をかわし、拳銃を郁へと向ける。
そして撃つ。

可憐で、無駄のない動き。

この動作をすること0.5秒。
訓練された動きだった。

しかしそれに対応した郁。

彼女も弾丸を連射する。

もちろん回転式拳銃リボルバーが狙撃銃スナイパーライフルの威力に、速さに勝てるわけもなく。

美鈴の放った弾丸は難なく郁の弾に弾かれた。
同時に彼女は新たに懷から拳銃を取り出す。

黒く、今まで美鈴が使っていた銃よりも少し大きく、重い。

単発式拳銃だ。

単発式拳銃は一本の銃身を持ち、一発の弾しか装填できない古式の拳銃。

次弾を装填するにも少し時間がかかるし、威力もそれほどでもない。

すでに郁の弾は美鈴の目の前にまできている。

しかし彼女の顔には焦りや苛立ちといった感情は一切なく、むしろ余裕そうな笑みを浮かべていた。

そして、撃つ。

彼女の弾丸は鈍い大きな発砲音をたて、郁の放った弾を無視し、郁本体へともものすごい速さで飛んでいった。

そして郁の弾はソフィアによって防がれ、美鈴は傷一つ負っていない。

戦闘（後書き）

すみません、短いです。

次回は多少長くなる（予定）なので、よろしくお願いします。

決着

「なっ……」

それに郁は小さく悲鳴をあげた。
すでに目の前に来ている弾丸。そして、

ガンッッ！

自分の持っていた狙撃銃がその弾丸によって弾かれた。

その、一瞬のすきに、美鈴はすでに目の前で足を振り上げて……

「ひっ……」

すぐに、彼女の目の前は真っ暗になった。

美鈴の足が、郁の首裏へと直撃した。

やがて郁は気を失い、後ろの方では一瞬にして間合いをつめた美鈴に愕然とするソフィアが間抜けな声をもらしていた。

もちろん、このときも俊也は眠りについたまま。

その頃、空では無数の星達が瞬き、流星のような輝きを放っていた。

彼女が郁を抱えて木の下へと降りると、ソフィアが駆け寄ってきた。

「ソフィア、彼女を縛ること、できる？」

「？……ああ、できる。だが縛る前に他に武器がないか調べた方が

……」

「ぬかりはないわ」

そういつて自分の手に持つ弾と拳銃をみせた。
それにシフィアはあ、とため息をついた。

「お前はそういう女だったな。
計算高いのを忘れていた」

「まあ。金髪美女にそんなふうに言われるなんて光栄ね」

「なんだと……？」

貴様も俊也^{コイツ}同様、私を愚弄するか……？」

「うつさい。あんた年とつたら垂れるわよ」

そういう美鈴の視線は彼女のスレンダーな腰まわりから少し上の、その大きな胸を見ている。

ぬれているせいか、いつもよりくつきり見えるそのプロポーション。

「なっ……」

真平らの貴様に言われたくないわ！ 垂れるほどのものでもないくせに！」

「平らじゃないわよ！ あんたこそしわくちやのババアになったら邪魔で仕方がなくなるわよ！ それに胸なんて脂肪の塊じゃない！」

「そんなに死にたいか！」

「あんた私に勝てると思っているの？ 自意識過剰な奴ね。そんなんだからあんたんとこの組織に殺されそうになるのよ！」

「同じような状況の貴様に言われたくないわ！」

「あんたはあまり実力ないんだから、後ろには注意することね。主に拳銃の弾丸には！」

「あからさまに宣戦布告してこなくていい！
そんなんだから俊也に迷惑がられるんだっ」

「はあ？ そんなの関係ないじゃない！」

先程までの戦いが嘘だったかのように、愚痴愚痴と低レベルの口喧嘩を始める女子二人。

しかし二人の口元はなぜか少し微笑んでいて。

「まあ、確かに美鈴はペチャパイ「おだまり！」ゲフウツ」

突然口を挟んできた俊也にすかさず蹴りを食らわす美鈴。

それにソフィアは驚いた。

いや、ソフィアだけではなく、美鈴も（蹴った後に）驚いた。

先程吐血して気を失った男が、なぜこんなにヘラヘラして美鈴にペチャパ「ゴホンッ」などといえるのだろうか？

まだ郁は気を失っているというのに。

実のところ気を失った理由を美鈴とソフィアは知らない。

俊也が能力を使うたびに寿命を削っているなんてことは、誰も知らない。

いや、訂正しよう。

俊也を超凜学園に勧誘した学園長とその旦那は知っている。他、一部だけ。

悠里や坂上などは知らないはず。

学園長等もあんな風に見えても秘密厳守する人たちだ。
いくら姪っ子だとは言え、勝手に人の大切な秘密をばらすような人ではない。

美鈴もソフィアも、謎を解決できずに俊也を見つめる。

「俊っ」

美鈴が聞こうと口を開いた瞬間。

「ん……………」

郁が声をもらした。
気が戻ったのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6496u/>

Rの称号

2011年10月29日15時11分発行